
新志短編集

奈森さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新志短編集

【Nコード】

N03420

【作者名】

奈森さくら

【あらすじ】

新志短編集です。どれだけ続くかわかりませんが、頑張ります

彼の夕飯

「おーっす」

玄関先から聞こえる声に身体は素直に反応して、彼と視線が合わさる。少し疲れた様子の彼は躊躇なく、むしろ当然かの様に私の向かいの柔らかいソファ―に腰を下ろした。

「……また来たの？」

内心では嬉しく感じながらも、私がそれを素直に口に出す事はまず無い。決まって、冷ややかな鬱陶しいといった視線を彼に向けてしまうのだ。しかし彼は、私の本心に気がついているのか、それとも余程のKYか。どちらにせよ、私の態度など全く意に介していない様子を何時も見せる。

「今日は何だ？俺、肉が食いてえな」

「……残念だけど、あなたの希望には添えないわね。今日は野菜スペシャルだから」

「えゝ。肉は？」

「無いわ。文句があるんなら、外で食べれば？私はむしろ、そうしてほしいくらいなんだけど？」

また思ってもいない事が口から出る。普通の人ならここまで言われると、反論の一つや二つしてやろうという気持ちになるのかもしれない

ないが、彼は何も言わない。私があんな言い方をしても

「まっ、いいや。お前の飯なら何でもうめえしな」

と、子供ばりの笑顔で答えてくれる。

「……ちょっと、待ってて」

「ああ」

結局、彼の為に料理をする私。

炊飯器を開けると、まだ一膳分のご飯は残っている。

(……私も、バカね)

明日もきっと彼は来る

そして、明日もきっと、私は彼の分のご飯を残してる

お肉、明日買いに行こうかしら

ふと、そう思った

傍に居てほしい

「……………ねえ、工藤君」

夕飯の買い物に付き合ってくれた隣人と肩を並べて帰路についている時、私は彼に尋ねてみた。

「……………今日、蘭さんと出掛けるとか言ってなかった？」

両手に買い物袋を持ち歩く彼は、頭は動かさずに「蘭に用事が出来たんだよ」と言った。口調からは不機嫌さが感じ取れる。もしかして、聞かれたくなかったのか。楽しみにしていたデートを反故にされて拗ねているのが見え見えである。

「残念だったわね。せっかくのデートが中止になって」

幾分からかう様な口調で言うとは彼は私にジト目を向けてきた。本当に子供が拗ねた時の目をしてる。

「……………何で嬉しそうに言ってるんだよ」

最近、私随分とボロを出してる気がする。今だって、彼が彼女とのデートが中止になった事が内心嬉しくて表情にも出てるみたい。だけど史上稀に見る鈍感男の彼だから、私の内なる気持ちに気づく事は無い。

「ほら、早く帰ろうぜ？」

私はもう少し二人で居たい。こんな風に二人で買い物なんて、今度何時出来るわからないし、彼との時間は私にとってとても大切な時間。じっくりと味わいたい。

「……今日、夕飯、家で食べていったら？ 買い物に付き合ってもらったし、お礼って訳じゃないけど」

「……珍しいな。お前から来いなんて」

珍しい事じゃないわよ。

私は何時も思ってるわ

あなたに傍に居てほしいって

本を探して三千里

「すいません。今入荷待ちでして」

「……そうですか」

志保がそう言われたのはこれで五軒目。ここまで見つからないと本当にそれが存在するのか疑わしくなってくる。

「……もう、帰ろうかしら」

深い溜め息とは裏腹に足はまだ訪れていない店に向かって歩き出す。ここまで探してるんだから見つけるまでは帰れない。志保自身、これほどまでに一つの事に熱中したのはいつ頃以来だろうか。

そもそも、何故志保がそんなにも必死になっているのか。

原因は昨日の夜、新一から聞いた話にあった。

「見つかんねえんだよな。探偵左門字シリーズの最新作……。もう三日も探し続けてんのによ」

昨日の夜、阿笠邸に夕飯をあやかりに来た新一は愚痴をこぼすかの

様にそう言った。探偵左門字シリーズは新一が愛読している新名香保里著書の推理小説で、つい先日シリーズ最新作が発売されたのである。人気シリーズの最新作という事もあって、テレビでも、小さな扱いだが報道されていたし新聞にも記事は出ていた。愛読者の新一がその情報を聞き逃す筈は無く早速手に入れようとあちこちの書店を巡ったらしいのだが、見つかるのはいつも「入荷待ち」の看板のみ。肝心の本にはお目にかかれていないらしい。

それを、一見興味が無いといった様子で聞いていた志保。しかし、志保の頭の中は既に「明日は何の用事も無いわね」という考えで埋まっており、翌日、朝十時から本探しの旅に出掛けていた。

「すみません。入荷待ちです」

これで十二軒目。時刻は間もなく午後五時半になろうとしている。

新一は今日サッカー部の練習に付き合うとか言っていたから帰りは六時頃になるはず。

(……………何とか工藤君が帰ってくる前に)

しかし何とか頑張って歩いて行ける場所にある本屋は後一軒。それ以外は徒歩ではきつい。

(……………次無かったら、諦めるしかないわね)

痛い足を動かして志保は、また歩き出す。

「おお、新一」

志保の読み通り新一が帰宅したのは午後六時過ぎ。阿笠邸でも夕飯の仕度が進んでいた。

「おお、そうじゃ新一。テーブルの上に置いてある物を見てみなさい、君が喜ぶ物が置いてあるぞい」

博士に促され新一がテーブルのそばに寄った。

テーブルの上には袋に入った分厚い書物。それは間違いなく、新一が探し求めていた探偵左門字シリーズ最新作であった。

「なっ、何でこれがここに!？」

興奮しているのかかなり慌てている。

「志保君が見つけてきたんじゃないよ」

そう言われ新一は台所で食事の仕度を続ける志保を見た。思わず一瞬目があうと志保は俯き加減に目を逸らし「買い物に行った時に、たまたま見つけたのよ」と言った。

「……………そっか。サンキューな」

「……………別に」

新一は志保が買った本を大事そうに鞆に閉まった。

「宮野」

「……………何？」

「……………足、ちゃんと湿布しとけよ」

志保は小さな声で

「……………わかってるわよ」と返事をかえした。

喫茶店（前書き）

恋愛要素あまりなしです

喫茶店

静かな店内で、たまにアイスコーヒーを飲みながら志保は読書に耽っていた。店の隅の方の席に座っている志保、自分以外に客はいない。正に一番読書に適している場所と言っているだろう。

阿笠博士の友人が勤める研究所で働く志保は、昼休憩がてらたまたま見つけた研究所近くの喫茶店に入った。初めて入る店だが、店内は静かで店員も愛想が良くアイスコーヒーもなかなか美味しい。

(……いいわね。ここ)

研究所では何時も膨大な量のデータと相対しているが、ここはそんな所とは無縁の場所、研究で疲れた頭をこの喫茶店で休める事が出来た。

(……今度、工藤君と来ようかしら)

来週の日曜日は久々の休日。恋人の新一を誘ってここに来よう。新一もきつと気に入ってくれる筈。そんな事を考えつつ、志保は本を閉じ店を出た。

しかし、新一との喫茶店デートは叶わなくなってしまった。志保は、新一にすぐ喫茶店の話をして来週二人で行こうと約束していた。新

一も一度行きたいと言ってくれたのだ。

しかし、新一と二人で行った時、喫茶店は既に閉店の貼り紙を出していた。

「……潰れちゃったのか。残念だな」

どうやら志保が初めて訪れた日が、最後の営業日だったらしい。志保もあの日以来、研究所が忙しくなった為喫茶店に行っていなかったから、まさかこんな事になっているとは気付かなかった。

「………良いお店だったのに。せめて、後一回来たかったわ」

志保はガラス越しに店内を覗き込んだ。

あの時の事がまだ頭の中に鮮明に蘇る。

静かな店内

愛想が良い店員

美味しいアイスコーヒー

「いらっしゃいませ」

扉を開けると、また店員が笑顔でそう言ってくれそうな気がする。

「………良いお店ですね」

志保は誰も居ない店内に向けて言った。

「ありがとうございます」

そんな声が聞こえた気がした。

姉妹喧嘩（前書き）

新一君は出てきません。志保ちゃんと娘二人がメインです

姉妹喧嘩

「駄目！これ私の！」

「何でお姉ちゃんばっかなの！？私もあそびたい」

一つのぬいぐるみを巡って幼い姉妹が小競り合い。よくある光景だろう。

「これはお姉ちゃんの誕生日にママがくれたんだから、お姉ちゃんが使うの！！」

「でも、お姉ちゃん私の絵本読んでたよ！？」

この手の喧嘩はきっとそう簡単には収まらないだろう。姉は姉で年上だからという理由引き下がれないだろうし、妹もぬいぐるみを手に入れる為に引き下がるつもりはきつとない。

「私の！！」

「私が使うの！！」

どうやら二人には一緒に使うという選択肢はないらしい。

「私が使う！！」

そして遂に妹が武力行使に出る。ぬいぐるみの手を掴み引っ張った。姉も負けじと、自身の方に引っ張る。

互いに引っ張り合う状態がしばらく続き、やがて

「あっ!!」

「ああ!!」

当然の結果というべきか、ぬいぐるみの手は見事に取れてしまった。姉は途端に泣き崩れ、妹は困惑した様に立ち尽くしている。

「どうしたの?二人とも」

姉の泣き声を聞いて、姉妹の母親が庭から駆けつけた。

「ママ!!」

姉は母親を見るなりすぐに母親に抱きついた。

「どうしたの？何があったの」

母親は、床に落ちているぬいぐるみを見て状況を理解したらしく、泣き喚く姉を優しくあやした。

「亜紀、駄目でしょ？お姉ちゃんと喧嘩しちゃ」

「……だって、お姉ちゃんがぬいぐるみ貸してくれなかっただもん」

亜紀と呼ばれた妹は、多少罪悪感があるのか幾分小さな声で喋った。

「波瑠、あなたもお姉ちゃんなんだから、少しぬいぐるみ貸すぐらい、いいじゃない。妹には優しくしなきゃ駄目よ？」

「……………」

「これからは、仲良く二人で遊ぶ事。わかった？」

二人は黙って頷いた。

「まま、直る？」

「大丈夫よ。心配しなくても、すぐに直してあげるから」

数日後、家の中では二人仲良くぬいぐるみで遊ぶ姉妹の姿があった。

停電の中で

「大型の台風14号は、今夜にも関東に上陸すると思われます」

テレビのニュースは先程から接近中の台風について報道している。因みに今は十月下旬、この季節外れの台風も地球温暖化が成す異常気象の一つと考えてもいいのかもしれない。雨はまだ降っていないが風がだんだん強くなり始めている。庭に置いてあった風で飛ばされそうな物はさっき部屋の中に運んだから心配する事はないだろう。

「さて、そろそろ夕飯の支度しなきゃいけないわね」

志保はそう言ってソファから立ち上がった。

六時を廻った頃だろうか、昨日から学会に出掛けていた博士から電話がかかってきた。どうやら台風のせいで列車が止まっているらしく、今夜は帰れないという連絡だった。外は既に暴風雨。確か一時間程前に暴風警報が出ていた。博士が帰って来れないのも何となく予想は出来ていた。

それから三十分程した時、阿笠邸のチャイムが鳴る。こんな天気の時、来訪者など一人しか思い浮かばなかった。

「ふう。すげえ雨だな」

「当たり前でしょ？ 台風なんだから」

「あれ、博士は？」

「この天気で電車が動いてないから、今日は帰って来ないわ。それより工藤君、お風呂入って来たら？ 風邪ひくわよ」

志保にそう言われ新一は風呂に。因みに二人は恋人同士。新一は毎日朝食と夕食を阿笠邸で食べるのだ。

「おっ、今日はカレーだな。うまそう」

まるで本当の子供の様な新一を見て志保は小さく微笑んだ。

「あっ、お茶持ってくるわ」

そう言って志保はキッチンに向かう。その時だった。

「えっ？」

「あっ？」

部屋の中の電気が消えた。どうやら停電の様だ。

「志保大丈夫か？」

「……え、ええ。何ともないわ」

「志保、お前そこでじっとしてろよ？下手に動く怪我したりするかもしれねえし。俺が懐中電灯探して来るから」

「あっ、懐中電灯ならテレビの台の下に入ってるわ」

しばらくして懐中電灯を持った新一が戻って来た。何故かカレーも一緒だ。

「ちょっと、何でこんなところで」

「へへっ。何か楽しいじゃん、こういうの」

「………本当に子供なんだから」

でも、新一と二人でこうしているのは悪くない。志保はそう思っていた。

「復旧しねえな」

未だ停電は続いている。

その時、懐中電灯の灯りが消えてしまった。

「げっ、電池切れかよ」

今度こそ本当に真っ暗闇だ。

「なあ志保、どっかに電池無かったか？俺探して……」

その時志保が新一の腕を掴んだ。

「……志保？」

「……ひとりにしないで」

新一はそう言う志保の肩をそっと抱き寄せた。

「大丈夫。ずっとここにいろよ」

「……ありがとう」

そのまま二人は眠ってしまう。

翌日、朝一の電車で帰って来た博士はキッチンで仲良く寄り添いながら眠る新一と志保の姿を発見し、小さく微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0342o/>

新志短編集

2011年10月6日17時15分発行